



TITLE:

<批評・紹介>礪波護編「中國中世の文物」

AUTHOR(S):

池田, 温

CITATION:

池田, 温. <批評・紹介>礪波護編「中國中世の文物」. 東洋史研究 1994, 53(3): 564-574

ISSUE DATE:

1994-12-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154498>

RIGHT:

批評・紹介

礪波 護編

中國中世の文物

池田 溫

本書は京都大學人文科學研究所における一九八六～九〇年度にわたる班研究の成果をとりまとめ、その後の新知見をも加えて公刊された長短一八篇の論文を含む大冊である。人文研の「中國中世の文物」班研究は礪波氏を班長とし、新出考古資料を中心に傳世品を含む様々な文物を紹介してその歴史的意義を検討し、研究の視野を広げてゆくことを目標として、研究所の内外から三〇名近い班員が参加し、隔週水曜日に文物をテーマとする研究報告を行い討論する形で推進された。ここで中國中世というのは、漠然と秦漢～唐・五代の時期を指し、今日の中國で用いられる中古の呼稱に近い。そしてこの班研究は九一年度から「秦漢隋唐の文物資料」の名のもとに繼續されており、本書に寄稿した多くの班員が引き続きこの共同研究に従事しているのである。

編者礪波教授は『唐代政治社會史研究』（一九八六）等で知られる唐史の權威であり、官僚制を核とする制度史・財政や兵制にかかわる社會經濟史・國家の佛道統制をめぐる宗教史・白居易らの詩文を通ずる文化史等各領域にすぐれた論文を發表し、わが國東洋史學界の今日の唐代認識を先導してきたことはよく知られている。そう

した研究實踐の中から文物研究の重要性を夙に認識し、洛陽含嘉倉（一九八〇）・嵩岳少林寺碑（一九八七）・唐代金銀器（一九九〇）等の對象に取組み、従前の研究水準を一新する論考を著わし、歴史研究に石刻や考古學的出土資料を活用する範例を示された。その礪波氏を圍む約三〇名の共同研究數年の結果がズッシリと重い論文集となつて公刊されたことをまず喜びたい。

人文研からは既に『漢代の文物』（林已奈夫編、一九七六）『戰國時代出土文物の研究』（林已奈夫編、一九八五）という古代中國の文物を主題にした班研究報告の大著が世に送られ、學界を益していることは周知のとおりである。

文物の語は日本では普通文明の所産を汎稱するかたいことばであるが、近年現代漢語の文物の意味で使われることが珍しくなくなつてきた。日本語の文化財に相當する文物の語の使用は中國研究者の間では既に一般化しているが、右の二書などはこの語を普及させるに一定の役割を演じたかと思われる。『漢代の文物』は衣服・建築から什器・農工具・乗物・娛樂・樂器・武器・旌旗・書契にわたり、劉照「釋名」等文獻の説明と出土品・繪畫等を綜合し、漢代の物質生活をリアルに復原することを目標に圖版を多用し大きな成果を挙げた。『戰國時代出土文物の研究』となると、文字資料も含む出土文物自體の研究と、それら出土文物を手掛りとする歴史研究の兩種を併せ含み、九篇の論文はそれぞれ獨立の關心と内容をそなえ、『漢代の文物』のように一貫した完結性をもつ書とは異質な論文集となっている。これと似た同じ人文研の班研究報告『新發現中國科學史資料の研究 譯注篇・論考篇』（山田慶兒編、一九八五）も論考篇は一篇の論文集であるが、譯注篇の共同作業を中核とする點、科學史

という固有領域に主題が集中している點でまとまりがよい。文物や新出土資料を対象としつつも本書は『漢代の文物』と全く性格を異にするのもとより、右にあげた二種の論文集と比べても対象の年代的擴がりや戰國時代の數倍に達し、また執筆者の關心が歴史學を核としつつ思想・宗教・美術・政治・法制・社會・經濟等多岐に涉る點で、獨自の風格を示す書となっている。

研究班員の過半は中國中世史研究會に屬し、魏晉南北朝・隋唐時代史の専門家である。従つて同じ人文研から嘗て班研究の成果として産れた『中國中世の宗教と文化』（福永光司編、一九八二、一〇篇收）や『中國貴族制社會の研究』（川勝義雄・礪波護編、一九八七、一八篇收）の兩論文集と本書が密接な内的關連を有するのは當然といつてよい。右の二冊の論集の寄稿者中、前者の兩名・後者の八名が本書にも寄稿しており、編者の共通性とも相まつて特に『中國貴族制社會の研究』と本書は姉妹論文集ともみられるであらう。

他方嘗て漢代の文物研究班に屬した曾布川氏と戰國時代出土文物に執筆した富谷氏が本書の執筆に加わっているのに明らかなごとく、先行する時代の文物研究の蓄積が中世文物班研究にゆたかに攝取されている。人文研には東方文化學院京都研究所以來、中國考古學や金石・繪畫史研究の強力な傳統が存し、龐大な石刻拓本をはじめとし諸種の考古遺物や文化財が收藏されており、文物研究の場として類稀な好環境をなしている。かくて中國文物の研究と六朝隋唐史研究の兩傳統がみごとに結合した所に本班研究が發足したのであった。班研究の経緯については、東方學報京都第五九冊・六六冊の彙報欄に報告者と題目が載っており、九三年末までの八年間に中國中世の文物と秦漢隋唐の文物資料兩班を通じ計九八報告の行われた

ことがわかる。報告者には一時的滞在の外國人研究者なども含まれそのテーマも多様であるが、本書に収める諸論文もその多くが研究會で口頭發表され班員の討議をへたものとみられる。八年の間に班員も一部出入があるが、その間三、四回發表している人が十數名を數えその殆どは本書に寄稿されている。もつとも班研究の所産がすべて本書に盛られるわけではなく、東方學報等に掲載される論文もあり、例えば小南一郎氏の「神亭壺と東吳の文化」は本書と同時に刊行された第六五冊に收録されている。本書の主題にふさわしいこの論文がどうして含まれぬのかわからないが、或いは九〇頁に及ぶこの力作は頁數の制約から東方學報に回ったのかも知れない。それはともかく「モノ」を使った研究という一點（本書序）にテーマのしばられた班研究とはいへ、本書の論文は一般に考えられている文物研究の範疇に収まるものとそうでないものが混在しており、書名も『中國中世の文物と社會』とでもした方が内容にふさわしい。以上本書の生れる背景とその特質を概観したが、以下各篇の内容の紹介に入ろう。時代的に分けると漢代三、西晉一、六朝一、南北朝一、南朝一、北朝三、北朝隋唐一、唐代七となっており、文物に即した研究九、文物をめぐる研究一、文書の研究三、その他歴史研究五を算える。

富谷 至「大英圖書館所藏の敦煌漢簡」

著者が一九九二年三・九月の間スタイン將來敦煌漢簡を實査し、注目すべき以下の所見を寫眞を添えて説明する。賣手と買手兩者の簡の殘る神爵二年賣布相券の簡側の切込み（刻齒）の位置五ヶ所がピッタリ相符合することを確認し、かつ切込みの間隔が人さし指の關節の長さに相當すると指摘するのは大きな發見といえよう。指の

關節の位置を三線や三點で示し自署の役割をになわせ本人確認の手段とする畫指は、東亞で永年にわたり廣汎に行われたが、その源流がここに見出されたのである。もっとも叔山氏の調査された居延本始元年賣券には九本のきざみがあり、指の關節の間隔という認定には複數例の提示を必要としよう。又警戒符にも切込みがありそこに文字の一半が記入され契合の用に使われた例を示し、文字は符の番號の類ではなからうかと推測する。他方簡を綴合して冊書となす場合、簡側に紐をかける小さい切込みをつけた醫書簡・廿八宿簡をあげる。内容は書籍の一部でも、長期保存の整冊でない寫しや習書には當然こうした切込みは見られない。なお文書や帳簿にも簡側に編綴の跡の残るものがある。俸數や食糧の受領簡にもその例があり、支給場所で書記が一聯の受領證を作成し編綴整理していたと解される。その他守御器簿簡の再利用や詔書簡のうちの例を検討し、また削り屑（梳）四十數點を検出している。なお削去・修正を加えられた簡、再利用された形跡のある簡を例示し、簡牘の實物に即す研究に際し留意すべき諸點を教えられる。近年原簡に接する機會が得られるようになり、本書と時を同じくして刊行された『中國出土文字資料の基礎的研究』（平成四年度科研報告）に收める叔山明「刻齒簡牘考略」には、九〇年臺北で居延簡を調査した知見が盛られ、本論の切込みの検討と併せみられるとよい。

上田早苗「王莽政權と居延新簡」

森鹿三「居延出土の王莽簡」（一九六三）のひそみに習って、近刊『居延新簡』（一九九〇）や『敦煌漢簡』（一九九一）から王莽時代の詔書・俸祿に関する簡等を取上げた割記。文末に「王莽の理念體系」三頁を附し「こうした王莽の理念體系と居延新簡の内容は

大きく相貌を異にしている」と結ばれるが、簡の内容のいかなる點が理念と異なるのか讀者にはわからない。この最後の節は蛇足ではなからうか。

佐原康夫「漢代鐵專賣制の再検討」

著者は曾て影山剛氏の『中國古代の商工業と專賣制』（一九八四）を詳しく書評し（本誌四四—四）「中國古代の商工業と專制國家の內的關連を論じた數少ない專著であり、商工業の成長から衰退までの過程を論理的に把握しようとした貴重なパイオニアワーク」と認めつつ、「代表的商品たる鹽と鐵器の生産地が交通の不便な特定の土地に局限されていたために、大商人の生産と流通の獨占と投機的な不等交換を惹起したことが、商工業の發展と專賣制の質を規定している」と讀みとれる影山氏の主張に疑問を投じ、製鐵遺跡が内地の都市やその周邊から少なからず發見されており決して深山窮澤に限られず、獨占の大商人は鐵器の使用が廣範に普及した後で出現した一部の特殊な事例と解すべきではなからうかと批判を加えた。それ以來一貫して續々發見される製鐵・鐵器に関する考古調査や研究をひろく追跡検討し、「漢代の製鐵技術について」（一九九〇）「南陽瓦房莊漢代製鐵遺跡の技術史的検討」（一九九三）を著した佐原氏は、本論文に鐵專賣制の史的ベースクティヴを總括的に描き出している。前漢には年產數百トン規模の鐵鑛山が、專賣時代全國に約五〇設置された鐵官の近旁等に相當數存在し、年產鐵總額を一萬一萬五千トン（吉田光邦による宋代年產推計は三〇四萬トン）程度と見積り、それで鐵器は小農民にまで充分普及していたと解する。「史記」貨殖列傳の鐵器千石で一〇〇萬錢の賣上げとみる宮崎市定説により、鐵器の小賣り價格は一斤（約二五〇瓦）一〇錢とな

り、農具一點數十錢に過ぎず決して高價ではなく農民が購入できたのである。官營工房では官用器物の自給的生産を行ない、民間に流通した鐵器は商品として民間で生産されていたとみられ、鐵の流通は決して遠隔地商業を牛耳る大商人によって壟斷されてはいなかった。製鐵技術面では、前漢後期から魏晉南北朝にかけ製鋼技術が大發展し、鑄鐵を熱處理脱炭して鋼材化する高度技法を完成させた。

武帝後期の鐵專賣は「未曾有の財政危機に見舞われた漢王朝は、管子の輕重策を奉ずる財務官僚を登用し、元狩四年から鹽とともに鐵を專賣化した。鑛產資源の分布に應じて郡單位に置かれた鐵官は、縣レベルに出先機關を配置し、從來の官・民の鐵器生産と市場の廣がりに對應した組織を持っていた。鐵器の生産流通の官僚的支配は、山林資源の國家獨占と、市籍を通じて人頭的に把握された生産者、卒徒の強制勞働力の統合管理によって實現した。これは戰國時代の山林鑛澤管理と、郡縣制の基本的枠組みである人間の頭人的支配を組み合わせて強化し、大商人層の「不正な」利潤を國家に集中することを目指すものであった。このような理解に立てば、專賣制下の鐵器生産が官營か民營かを峻別する必要はない。富商大賈を排除した上で、生産の末端に下請け的な民間生産者がいても不思議ではない……このような專賣制度は……一連の財政改革の總仕上げとして國家的物流システムを確立した均輸平準の制度に包攝されることによって、ようやく安定した。その結果鐵器の生産流通の地域差が行政的に調整されて平準化され、國家の畫一的な生産管理がむしろ様々な製鐵技術を普及・混淆させ、新たな技術的成果を生み出していったと考えられる」というのが著者の基本的見通しである。曾て專賣制下の鐵器生産の官・民營を焦點に影山・藤井・伊藤氏らの

論争はなばなしかった時代から、鐵の考古學の飛躍的前進をテコに經濟史の理解も新しい次元が切り開かれたわけで、著者の多年苦心した課題だけに読む者に迫る重厚な論旨に満ちている。

中村圭爾「江南六朝墓出土陶瓷の一考察」

墳墓の發掘報告を手廣く集成し、紀年墓約一五〇件にしぼって南京周邊（第一）、安徽・江蘇・浙江（第二）、浙東西・瀕海方面（第三）の三地域に分ち、副葬陶器を生活用器・模型・俑等に分類し詳細な紀年墓出土陶瓷一覽表を作成し、年代的推移と地域特性を丹念に考察する。吳・西晉・東晉・南朝の三期に大きく段階區分されるが、南朝に紀年墓は相對的に乏しく副葬品の種類も限られてくる。

穀倉は東晉初が下限、模型器についてみると地域的に第一、二、三の順に數量と出土頻度が減少する傾向がみられ、年代的には吳から西晉へと遞減し、東晉以降一旦見られなくなるが南京周邊では南朝に再び現れる。

東晉墓の最大級のもの、明器構成は「通典」卷八六の傳える賀循の説にかなり對應している。華北と比較するなら、三世紀末では江南の出土陶瓷セットと基本的に變らぬが、四世紀以後になると北朝墓からは模型や俑が大量に出土し生活用器の種類が比較的少ないという顯著な差違がある。

陶瓷の産地の明らかな物については、出土例からその流通範圍を知ることができ、會稽郡の上虞・始寧產青瓷の穀倉が建康周邊まで廣く流通しており、又湖州に近い德清窯の醬釉瓷も建康はもとより浙西・浙東各地に遍く分布していた。他方一墓中の明器が復數の窯の產品よりなる例も存し、陶瓷産業の發達とそれに應ずる需要者の多様な選好が認められる。豊富なデータを克明に整理し、副葬陶器

を手がかりとして江南六朝の社會文化の諸相、とりわけ商品流通の實情について示唆に富む認識を産み出した本論文は、文物を活用した歴史研究の美事な成功例といえよう。

河野道房「北齊婁叡墓壁畫考」

一九七九—八一年に太原市南郊で發掘された北齊の外戚、太師・并州刺史婁叡（一五七〇）の墓道を飾る乘馬人物の行列圖等は、遺品の乏しい魏晉南北朝繪畫の精華と見られ、殊に瓜實型のふつくらした人物の個性的顔貌表現や馬のいきいきした動態表現は、從來知られなかった新しい畫風の存在を強く印象附けるもので、發見時から注目されてきた。本論文は宿白・金維諾・史樹青・謝稚柳ら中國學者の諸論考をふまえた上で、北齊の墳墓壁畫はもとより漢・唐代の墳墓・石窟壁畫等と可能な限り比較検討を深め、その基本的特質を鮮明ならしめようと努め、現段階で最もまとまったスタンダードワークとなっている。婁叡は隋僧靈裕の外護僧でもあり、安陽の寶山寺の建立を支えた。本墓の墓室裝飾にみられる磨尼寶珠や蓮華など佛教的圖像の存在も、墓主の經歷と關連して理解される。著者は人物表現について「この頃の畫壇には「秀骨清像」に代表される北魏系（南朝畫風と西域畫風の融合で生れた）、婁叡墓に代表される鮮卑系（または北魏の鮮卑と區別して北齊系）、そして濃い隈取りの西方系、という各種の畫風が混在していたのではないか」と解し、一方南朝畫像磚に通ずる北魏司馬金龍墓出土屏風漆畫列女古賢圖や北齊崔芬墓壁畫の如き南朝畫風も擴がっていたとみる。漢晉期の寫意的ともいえる簡潔な描寫から、生動感を伴った寫實的な馬の表現にみごとに轉換していると著者は評し、こうした婁叡墓壁畫の背景には楊子華に代表される北齊畫壇の高い水準の繪畫（特に動物

畫）製作があつたとする。既に漢化が進んだ隋直前の時期の并州の人物群像をつぶさに視ることができるのは、當代史を考える者に限らないイメージを提供してくれる。（挿圖65點は全て既刊書から採れる）

曾布川 寬「龍門石窟における北朝造像の諸問題」

近年龍門石窟を現地調査されている著者は、低位置にあつて風化が進んでいる爲あまり注意されなかった路傍龕の交脚彌勒像を、古陽洞の長樂王夫人尉遲氏彌勒像龕（太和一九）等と比較し、これを雲岡様式のまま洛陽遷都後間もない時期に造營されたものと認める。

次に孝昌三年（五二七）太尉皇甫度により造營された舊稱石窟寺（皇甫公窟）と孝昌元年司空皇甫度が比丘尼道暢らの亥（亥）劫千佛造像を助けた蓮華洞の造像兩者について、舊拓により「太尉公皇甫公石窟碑」と「比丘尼道暢造千佛記」を紹介し、該窟の理解を深める。そこで石窟碑の泐損した題額を「魏侍中／□□□／司空公／太尉公／皇甫公／石窟碑」と復原し、皇甫修・皇甫度兄弟の爲の造窟とみる新説を提出している。最後に路洞と周邊窟の造營年代を、造像様式に現れるデフォルメ・像の丸み・裳懸け座の髷の線の文様化・光背の頭光が身光の同心圓や平行線を重なる手法・淺浮雕の多用に着目して、いわゆる龍門様式と異なる特徴を認め、東魏初と考える主張をのべる。半世紀前の水野・長廣兩氏の調査以來の研究蓄積と現状調査を綜合した精密な論考で、舊拓の苦心録も含め龍門研究の進展に寄與する所少なくないであろう。

神塚淑子「南北朝時代の道教造像——宗教思想史的考察を中心に——」

道教像は佛教造像流行の影響下に五世紀前半、南朝の陸修靜・北朝の寇謙之の時代から始まった。本論文は南北朝時代の道教像四九點（全て北朝のもの、道佛併存も含む、大部分紀年あり）を博搜集録し、外型と銘文を総合的に考察して、最古の始光元年（四二四）三原縣民らの「造佛道像一軀」の銘文に象徵されるように、思想的にも造型の上でも佛と道の混淆併存が顯著な特徴をなしている點をまず明示する。造像記には「道像」「皇老君文召像」「老君」「太上老君」「天尊」「元始天尊」の像名が現れ、又造像主には「道士」「道民」「道民女官」「男官」「錄（籙）生」などが見える。ついで代表的造像記四點、太和廿年（四九六）姚伯多造皇老君像碑・大統十四年（五四八）蔡氏造太上老君像碑・保定四年（五六四）姚道珽造老君像・建德元年（五七二）李元海等造元始天尊像碑を取上げ、可能な限り原文を録出しよく残るものは和譯を施し、造像の思想的社會的背景を追求する。全體に佛教の語彙が多用され、祈願の内容は亡者の死魂が三途八難の苦から濟われ仙界に昇るよう、現世の眷屬に福祐が及ぶよう、皇家と國土全體の平安、宇宙の一切の存在が苦難を解脱して正道を得るよう、と佛像の造像記と基本的に共通している。しかし姚伯多の文言には「老君言誦誡經」中の靜室の祈願文や「無上祕要」の諸齋願文と相類似するものが指摘され、蔡氏の碑の上部には數代前の高位にあった蔡洪像碑の題額が横行刻出され、一族の顯彰的性格が目立ち、李元海碑の文面に靈寶派の中心的經典「度人經」の本文や注に相類する個所が注意される等、當代道教の思想や儀禮の狀況を反映した點や系譜重視の時代相の顯現が示される。

道教像を造ったのは多く無官の庶民であり、かれらの最大の念願

は七世父母と表現される自分の先祖たちが地獄の苦しみから救われる所であったのである。

麥谷邦夫「梁天監十八年紀年銘墓磚と天監年間の陶弘景」

一九八六年江蘇省句容縣茅山の朱陽館舊址西方の一農家の壁中から、文革期に附近の南朝梁墓から掘り出された十四種十七個の有銘墓磚が発見され、陳世華氏の考證で陶弘景の弟子の墳墓のものと推定された。曾て陶隱居年譜を編み更に『眞誥索引』を作成した著者は、九二年に現地に赴き實狀調査したが、磚の保存はよくなかった。關係文獻の精査を通じ麥谷氏は陳氏の説に訂補を加え、幽館は道館ではなく墓を意味し、出土墓は陶弘景の墓に相違ないと認める。「梁天監十八年造雙十九（年立虛瑯）」「華陽（隱居）幽館」等の磚文から、著者は「周氏冥通記」等の所傳を参照して陶氏の晩年の狀況を次の如く復原する。天監十四年（五一五）夢告を通じ陶氏は仙官敍任（昇仙）を期待したが、弟子の靈媒周子良を通じ確かめた所五年か十年先との答に失望し、更に翌年周子良の昇仙に遇い、焦燥に驅られざるを得ず佛教へ傾斜を示し、十八年に至り翌年以降昇仙の可能性に期待して墓磚の焼成を始め翌年墳塋を築いたと推察する。しかし陶氏は大同二年（五三六）歿するまでなお十數年餘命を保ったのである。以上推理の妙は感嘆に値する。

福原啓郎「西晉の墓誌の意義」

中國の墓誌の起源については近年出土資料が増加し從來の諸説を再検討すべき段階に達しているが、著者は後漢に始まる墓室内に刻まれた被葬者に關する記錄（墓記・封記・畫像石題字・石椰題字・墓磚・神座の類A）と、魏晉の立碑の禁止の結果西晉に出現する墓室内の小型の碑形の墓誌（墓誌碑B）に大別し、三國・西晉のA十

二件、B二一件、A Bいずれか未詳五件計三八件を網羅的に表示し、Bの刻文に題・序・銘を完備する数例の存在を挙げ、それらは百字以上の長文を具え、北魏以降の墓誌に内容的に連なることを明らかにする。西晉のB系墓誌碑は惠帝期に比較的集中し、又出土地は殆ど首都洛陽附近である。西晉墓誌碑の産れた背景を著者は「郷里から離れ……宗族から析出された家族（さらには個人）」という……疎外された現実の状況下において、……家族内での死者に對する思いが……より尖鋭化し、より内面化し……結晶したのが中國における墓誌の本質」というように解釋する。「封氏聞見記」に傳える王戎の墓誌をB型墓誌碑と認定する論證もあざやかである。本論文には圖版も相當數挿入され、墓誌の源流を窺うに參考價值が大きい。なお吐魯番盆地で發見された承平十三年（四五五）沮渠封戴墓表は墓誌碑の型式を残し、邊地に晉の傳統の存したことを知る。

中砂明德「唐代の墓葬と墓誌」

近年唐代墓誌の資料集が續出し（『千唐誌齋藏誌』『唐代墓誌銘彙編附考』『隋唐五代墓誌彙編』『唐代墓誌彙編』等）、唐人の傳紀研究への参照はもとより、望族の系譜・官歴・制度語彙・正史以下傳存文獻の校訂等歴史家によって多面的に利用されている。しかし著者は從來墓誌の研究利用で閑却されてきた部面、即ち夫人や家族生活にかかわる記事及び埋葬の経緯、撰者と被葬者の交渉など、墓誌を通じて死者とそれを取り巻く人々との關係を窺う活きた史料として縱横に涉獵し、鮮明な唐代墓誌像を描き出す。夫婦合葬をはじめ一族を本貫に歸葬するに拂われた苦勞を豊富な事例で細敘する前半「旅櫬未だ歸らず」、中唐の韓愈・柳宗元ら古文家により、舊來の平板な四六文墓誌に代って個性を浮かび上らせる誌文が作られ

るようになる時代變化を軸に、墓誌の諸相を分析通觀する後半「陵谷遷移すとも」というユニークな構成をもつ。齒切れのよいセンスに溢れる行文は、多彩な事例と相まって讀む者を牽き附ける。

長部悦弘「元氏研究——北朝隋唐時代における鮮卑族の文人士大夫化の一軌跡」

北魏の帝室センビ拓跋氏は孝文帝の漢化政策を通じ太和二〇年（四九六）元氏に改姓し、魏末の河陰の變（五二八）・北齊文宣帝の彈壓（五五九）の大虐殺を蒙りながら、疎族の子孫は隋唐まで存續し活動を續けた。本論文は孝文帝以後唐代に至る元氏の事蹟を搜集し、文武の官歴や著作を調査統計して軍事から教育學問に重點の移ってゆく次第を通觀する。獻文帝以前ゼロであったのに、祕書省一七・國子學二・中書省二二・尚書省郎官一〇名の任官者が孝文帝以後現れた點、孝文以後北魏宗室九名の著編書一四、齊周から唐後期までに元氏後裔九名（元萬頃・元行沖・元結・元稹ら）の著作二九點が知られること、唐代科擧合格者が一五名に上ること、元氏の武官就任が唐初に止まることなどが挙げられている。漢族と通婚し北族の資質を失っていたとみられる元氏を論ずるなら、一般漢族士族と異質な傳統が存したのかどうかが焦點となろうが、それには全く觸れられていないのは物足りない。

谷川道雄「東西兩魏時代の河東豪族社會——「敬史君碑」をめぐって——」

「禪靜寺刹前銘敬史君碑」（東魏興和二年〔五四〇〕立）に、同寺重修者潁州刺史敬顯儒が自己の本貫平陽郡（臨汾）から同族敬氏十四名・柴氏三名・賈氏二名を河南の潁州に伴って管下の僚佐や守令に任じている例を注目した唐長孺論文（『山居存稿』收）に觸發

され、著者は河東敬氏の系譜と分布を追求し、東西魏の抗爭時代、平陽泰平の敬氏が東魏、河東蒲坂の敬氏が西魏に加擔し、のち兩者とも後裔が隋唐の官僚として繁榮したことを明らかにする。ただ敬氏は在地の豪右ではあったが郡姓には入らず、門閥著姓の影響力の下で郷人を動員武裝化して戰亂時代に據頭した存在とみられる。『隋唐帝國形成史論』以來在地の郷豪の動靜に歴史の推進力を見出してきた谷川氏は、河東南部の敬氏のケーススタディによりその具體相に迫り、裴・薛氏等著姓と敬氏の如き豪右、その下に郷人が生活する在地社會の構造を提示し、豪右がやがて科擧官僚に成長してゆくと思通される。

辻 正博 「郭氏家廟碑」小考

顏眞卿の書として聞える西安碑林の大功臣郭子儀の父敬之家廟碑は、碑陰に子儀の詳密な履歷と子七人・孫一五人・曾孫三人の官銜が刻される點で人目を引く。著者は舊拓を參照し「金石萃編」等既存の著錄の不備を訂し碑陽碑陰全面の錄文を提供するとともに、郭氏の系譜所傳の疑問、履歷の官名に後の書きかえを含むこと、碑陰の刻年が表面の廣德二年十一月より一年以上遅れる點などを考證し、更に家廟碑はもと敬氏の住んでいた常樂坊の邸宅に建てられたものと推測し、碑陰の子儀ら子孫の官歴は「寶刻叢編」の著錄する郭敬之碑陰の王繒撰・徐浩分書の子孫題名に當るのではないかと疑っている。但だこの最後の論は、分書（隸書）と明記され行書の現狀と一致せぬ點だけでも成立たず、何かの勘違いであらう。

渡邊信一郎 『臣軌』小論——唐代前半期の國家と國家イデオロギー——

則天武后の下で北門學士（劉禪之・元萬頃・范履冰ら）が編纂し

垂拱元年（六八五）公布された（著者は舊味道左遷事件が頒行の契機となったと指摘）上下二卷・十章よりなる「臣軌」は、長壽二年（六九三）から神龍二年（七〇六）にかけ、道德經に代つて貢舉の試験科目の一とされ、貞觀廿二年（六四八）太宗の命で太子の爲に作られた「帝範」四卷と並び、唐前期の國家イデオロギーを體現する書物とみられる。著者は本書が經史や諸子の引用を聯ねた類書的人格のもので、序と末尾の論を除けば概ね先行文獻の抜きがきよりなり、杜恕「體論」等魏晉期を頂點として普及した君臣の一體不可分性を強調する君臣同體論を主張の骨子としていると認める。これが生れた背景として當時の國家機構の危機——皇帝と宰相の最高意志決定をめぐる矛盾、入流者の増加ととりわけ雜色入流激増——をあげ、これに對處し官僚必須の教養として「臣軌」が打出されたのである。秦漢帝國における君—臣—陪臣の二重構造に對應する「孝經」から、隋以後の君—臣關係一元化に即應し「臣軌」が鼓吹されるに至つたとみるのが著者の基本的構想である。イデオロギー論を主體とする本論文にとっては末梢的ながら折角「臣軌」引用書表を掲げるなら、本文に明記されぬ書名には（ ）を附し區別表示すると一層有用になるし、雜色入流者の三品昇進を抑止する神功元年敕の親（事）品（子）は、「通典」卷一五・一九に引く同敕により視品に訂正さるべきことを附言しておく。

吉川忠夫 「韓愈と大顛」

法門寺から佛骨を宮中に迎えた憲宗に「論佛骨表」を上り潮州に貶された韓愈が嶺南で大顛禪師に教えを請うた逸話があり、宋代以來その眞偽をめぐる議論がやかましい。「與大顛書」三通が唐代潮陽靈山禪院に建てられた石刻により韓愈の文集（嘉祐壬寅一〇六二

刊小字本・方松卿校本）に收められ、朱熹は「韓文考異」でその真なることを主張している。愈と大頤の問答は「祖堂集」（九五二）「宗門統要」（一一三三）等の禪籍にも傳わり廣く流布している。

しかし蘇軾・黃震・陳振孫ら該書翰を偽とし朱熹らの理解と全く異なる見方をとる者も多い。本論文はこの興味深いエピソードをめぐる宋代一流の文人學者の所説を丹念に解析し、當代學藝・思想の一面を美事にえぐり出す。殊に唐代元和十四年・長慶中以來刻されたという三書翰や兩人の問答を載せる寺院碑石の拓本に關する歐陽修「集古錄跋尾」の記事等に注意し、刻石の種類が復數ありしかも轉々重刻された事情から、その信憑性に乏しい點を示唆された點は、中國の石刻を扱う者によい教訓となる。事實でない說話傳承も歴史の構成要素であり、そこから様々の文化事象理解のいと口が開けるのであり、吉川氏の麗筆はよくその醍醐味を味あわせてくれる。

氣賀澤保規「法門寺出土の唐代文物とその背景——碑刻「衣物帳」の整理と分析から——」

一九八七年西安の西一二〇料にある扶風縣法門寺の倒壊した塔跡の下から地下宮が発見され、佛舍利四種をはじめ咸通十五年（八七四）埋納された皇帝以下有力者たち（智惠輪三藏を含む）の夥しい寄進の品々が白日のもとにさらされ、現地に博物館が建ち觀光名所となっている。幸い「大唐咸通啓送岐陽眞身誌文」〈監送眞身使隨眞身供養道具及金銀寶器衣物帳〉なる二石刻が埋納品に伴出し、法門寺の歴史と施捨品の一々について具體的手がかりを提供した。著者は何回も現地を訪れ法門寺に關する研究を續けて來られたが、本論文には衣物帳の全文をA-Jの一〇グループに分けて綿密に移録解説し、出土品との對比研究の基礎を築くとともに、金銀器九六件

一々について衣物帳との對照一覽を作成している。出土品の多くに璽文が施されていて衣物帳の比定の手がかりとなる。金銀の目方を示すに約四〇瓦一兩の大兩が使われており、文思院の製作になるものが多い。注目される出土品に茶槽子・碾子・茶羅・匙子・瑠璃茶碗・柶（托）子等の茶器があり、著者は韓偓氏の風爐説を否定し香爐を文字通りにとる外、衣物帳の隨求を水晶球に充てる通説を批判し重量と數の合う銀の臂釧と解す新説を提出する。圖版は金銀器等に限られるが、九世紀の文物についての極めて豊富な情報が本文につまっております。氣賀澤氏の努力に敬意を表する。

劉俊文・牛來穎「敦煌吐魯番文書所見宴設司」

開元年間西州の大谷文書や八世紀末～十世紀の敦煌文書に現れる宴設司・宴設厨を取上げ、六典等官制の書に見えぬが、州におかれた機構として麵・油・胡餅等食品の提供や官人や使人の賜宴に當っていたことを示し、財源は公廩本錢の利息が充てられていた。乾元元年敕（七五八）には長安・萬年縣に一萬貫の本錢を備え毎月收利して右と同類の用途に供することが見え、首都にも存したとみられる。なお敦煌文書で宴設司の供食の對象となる衙前子弟といった職役や牧子・打窟人・諸種工匠の役使人の存在に注意されている。一番まとまったP二六四一の錄文に唐耕耦「敦煌社會經濟文獻眞蹟釋錄」（一九九〇）を参照していないのは惜しく、數個の□をそれにより読み増せる。

礪波 護「唐代の過所と公驗」

過所は關の通過に際し攜帶すべきパスポート、公驗は（旅行）證明書を意味する。入唐僧の使用した唐の過所・公驗が延曆寺・園城寺に傳來した所から、その研究は日本の内藤虎次郎により先鞭がつ

けられた。七十年代に吐魯番盆地の墳墓から過所・公驗關係の案卷が出土し、兩者を總合して研究できる新局面が訪れた。著者は過所公驗研究小史として約十頁を費し今日に至る日中の研究の展開を詳説し、日本に現存する最澄の明州牒（貞元廿年（八〇四））と台州公驗（貞元廿一年）、圓珍の大宰府・鎮西府（以上仁壽三年（八五三））、福州都督府・温州橫陽縣・温州安固縣・温州永嘉縣・台州黃巖縣・台州臨海縣公驗と台州牒（以上大中七年（八五三））、越州都督府過所（大中九年）、尚書省司門過所（同）計十三點をすべて圖版・錄文を上下段に對照する形で掲載し、丁寧に考察を加えられる。入唐僧の基本史料として、同時に唐代の貴重な文書としてこれら著名な旅行證書は數多く錄文や寫眞圖版として從來公刊されたが、すべてまとめて満足すべき正確さで集録されたのはこれが初めてといえよう。

敦煌・吐魯番出土のものは寫眞の見られるもの等若干にしほり、天寶七載（七四八）燉煌郡過所のうつし（首尾缺）と開元二十年（七三二）瓜州都督府給石染典過所（首缺）、及び開元天寶期の某往京兆府過所のうつし（首尾缺）、貞觀廿二年（六四八）庭州人米巡職公驗・調露二年（六八〇）某州某人行旅公驗（首尾缺）を紹介され、唐の過所と公驗の概要が窺えるよう配慮されている。寫眞と錄文に即した著者の考察は微に入り、越州都督府の圓珍に給した過所第三行の「丁滿年伍拾」の上の「」を發給時の記入とみる仁井田陞説を否定し、潼關通過時に關吏が記入したとする内藤説を墨色から正しと判斷したり、天寶七載燉煌過所の「參軍攝司戶少鷹」について陳國燦・程喜森兩氏が「攝司」、中村裕一氏が「攝判」と讀むのを斥け金岡昭光氏の攝司戸を採り、又他曹參軍の兼攝とみる中村説を否定し曹の附かぬ參軍の攝制と解されるなど、枚舉に遑ない。唐代

制度史に精通しひろく先行諸説を検討した結果生まれた見解だけに、著者の述べる所は說得性に富んでいる。文書の移錄方式は概ね正字主義、句讀は「。」一種に統一される。圖版を伴う場合は正字に統一してもまぎれる心配はないが、錄文だけの時は略字・俗字も使用する方が正確さに優る。又句讀も例えば『吐魯番出土文書』のように種々の標點を併用する方が、内容理解に資する所多い。いずれにしても礪波氏のこの勞作を通じ、唐代の過所と旅行の公驗に關する據るべき原文と理解が提供されたことは、今後の研究の深化を鼓舞するに違いない。漢代の簡牘や日本古代の木簡過所等も含め交通史の體系的研究が進められることを期待したい。

以上勿々に一八篇を簡介したが筆者の淺學のため甚だ要領を得ず、豊富な内容の一端も傳えていない點まことに汗顏の至りである。

近年中國では考古學の發達に呼應して新發見に事缺かず、國際的な學術交流も盛となり例えば日本で漢簡の國際シンポジウムが開催され、新出土簡牘が我國にもたらされて展示されるようなことも珍しくなくなった。本書の執筆者には専門の考古學者は加わっておらず、文物の研究も考古學的方法是従乃至間接に用いられているにとどまり、歴史學をメインに學際的研究が進められている。現在はまだに史學の分野で、かかる考古學や美術史と相協力して調査研究を深める必要性が切實に感ぜられ、それだけに本書の出現はわれわれにとってまことに力強い援軍といわねばならない。

最後に本書だけの問題ではないが、人文研の報告書に市販されぬものが多い點、入手困難から普及をはばんでいる現状を何とか解消していただきたい。筆者は幸い本書を受贈し充分に利用させていた

だいているが、多くの大學圖書館や専門研究者でも寄贈されぬ所が少なからぬのを見ると、定年退官しほそほ餘生を送り研究能力の乏しい筆者が、貴重な一冊を受贈することに良心の咎めを覺えずにいられない。そして寓目した古書店の目録に十數萬圓の賣價が附いているのを見ると、一體誰が古書店に賣りどこが買うのか不審であ

る。東方學報が定價一萬圓前後で市販されるなら、本書も三萬圓位で市販が可能なのではなからうか。

一九九三年三月 京都大學人文科學研究所

B5判 七二〇頁